

## さよならオッパイ

松田妙子

まいったな。乳がんだってよー。まさか自分がそんなものになるとは思わなかったです。しかもがんが広範囲に及んでいるので、右乳房全切除の手術を受けねばならなくなりました。シヨックを受けていないと言えば嘘になります。

がんの告知以来、不眠と食欲不振が一層ひどくなりました。しかもじっとしていられず、やたらと動き回るのです、ますます体力を消耗しています。手術に耐えられるように、体力をつけておかねばならないのに。

がんの告知前と後とで、私の生活と心情は一変しました。やっぱり、他の病名がつくのと、がんだと言われるのでは、言葉の重みが違うもの。スケジュールも、病院通いが最優先になるし、他のことをしているても、心ここにあらず。仕事としての、社会風刺の四コママンガも描かねばならないのに、オスプレイも消費税も大飯原発の再稼働も吹っ飛んでしまって、がんのことで頭が一杯です。睡眠と食事の問題があつて、旅行もできない私が、制約の多い入院生活に耐えうるかの懸念も強く、また、私の入院中、高齢の父の世話をどうするかという問題もあります。今から思えば、A・Kさんのことくらいで悩んでいた日々なんか、なんて平和だったんでしょう。

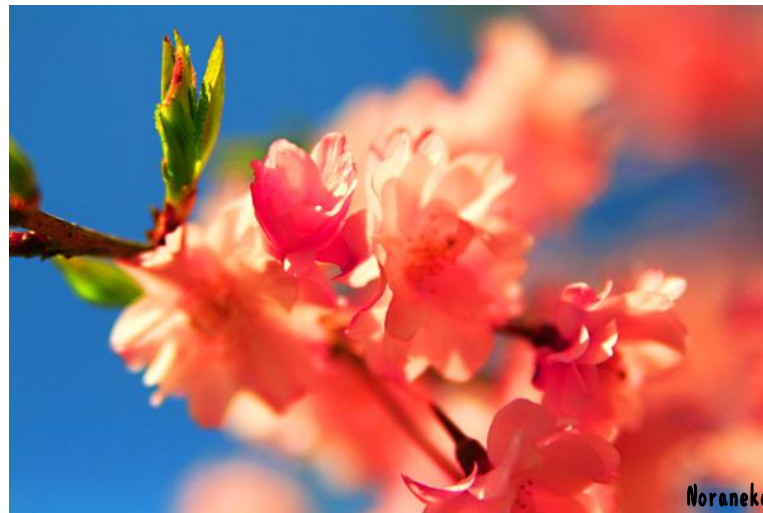
右胸のがんなので、右の乳房と共に、右のリンパ節も切り取らねばならないのですが、それで右手が不自由になって、ものが書けなくなったらどうしよう、という懸念もあります。私にとって、たとえ一時でも、絵や文章が書けなくなるとするのは、乳房を失

うことよりもずっとつらいのです。これまでいろんなものを書き散らしてきたけど、「これが最後の原稿」という覚悟で書いているか？いつ死んでも悔いのない生き方をしていくか？日々の雑事に追われて、だらけがちだった私にカツを入れるための、今回のがん宣告なのかもしれません。

一人で抱えているには重すぎるので、いろんな人に、「がんになった」ことを伝えていきます。各人の反応はさまざまですが、「大したことないかもしれないじゃないの。何をくよくよしているのよ」といった類の「励まし」は、かえって傷つけられるものだと知りました。私にとってがんの宣告は、一人で抱えきれないほど重いのに、それを軽んじられたような気がするのです。相手は私を力づけようとしてのことでしょうが、場合によっては叱責や嘲笑を受けているような気にもなります。私はただ、「ああ、あなたはがんの宣告を受けて、動揺しているのね」と、ありのままを受けとめてほしいだけなのに。

でも、伝えるべき相手がこんなに大勢いること自体は、幸せなことなんだと気づきました。かつての引きこもりだった私とは違う。この十年来、私がこつこつ人脈を開拓してきた結果として、心配してくれる人をこんなに沢山得ることができて、良かったです。

乳房なんて、そんなものが自分の体についていることすら、頃は忘れがちだったのに。というより、私は女に生まれたことが忌まわしく、ない方がましだと思っていたのに。いざ片方の乳房を完全に失うとなると、切ないです。乳がんと診断されてから、



何度も胸をなでてみます。このやさしい、やわらかい器官が、びっしりとがん細胞に侵されているなんて。「患部」「病巣」として切り捨てられるなんて。私の命を永らえさせるために、私の命の一部を切り離す。がんの手術とは、そういうものなんですわね。

「今、いのちがあなたを生きている」

今、私を生きるいのち。そのいのちの一部に、さようなら。乳房というのは目に見えて、手に触れることのできるものだけに、こういう気持ちになる乳がんの患者は多いのでしょうか。特に、女性らしさの象徴とも言える器官ですから、乳房を失うことで傷つく女性の気持ち、今までは馬鹿にしてたけど、私にもやっとなかかったような気がします。生まれたての赤ちゃんが最初に触れる器官ですもの、それはそれはやさしい、やわらかいものなんです。今、それが猛烈にいとoshii。「今までありがとう。そして、さようなら」——って、脱原発のスローガンみたいですね。

今はこれ以上書けません。頭の中が「がん患者モード」になってしまっただけで、原発問題も今の私には遠い気がします。全てはつながっているのに、それを頭でなく、心でわかるには時間が必要です。今はまだ、突然のがん宣告による衝撃と混乱のさなかにいる私です。

八月三十一日が手術日です。夏の終わり。私にとっても何かが終わわり、何かが始まる日です。